

徒然草 花は盛りに

① 桜の 時だけ のを 曇りがない もの いや、そうではないだろう。
 花は盛りに、月はくまなき をのみ見るものかは。

② 雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春の行方
 向かつ 見えない 簾や帳をおろして ものだらうか
 恋しがり 引きこもつ 過ぎていくのも

知らない も、なほ あはれに 情け 探し。
 今にも桜が 多い やはり 情緒があり 趣深い

③ 咲きぬべきほど 桜の梢、散りしれたらる 庭などこそ、
 もう 散りしおれ もう たる が

見どころ多けれ。
 が

④ 歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、

早く散り過ぎにければ。」とも、

⑤ 「さはることありて、まからで。」なども書けるは、

⑥ 「花を見て。」と言へるに劣れることがあろうか。
 言つたるもの 劣つてゐる もつともない
 参上しませんで いや、劣つていな

⑦ 花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、

⑧ ことにかたくなる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。
 とりわけものの情緒を解さない が

今は見どころなし。」などは言ふ ようだ
 が と もの が

⑨ よろづ のことも、初め終はりこそをかしけれ。

どんな

おもしろい

⑩ 男・女の情けも、ひとへに 情愛 一途に 契りを結ぶ ことだけよいものだと

いう

いや、そうではない

だろうか。

⑪ あは 契りを結ばないで 終わつてしまつた 辛さ 思い

で やみ にし 夢さを思ひ、

かは。

⑫ あだなる 契りを離れた所で 遠く 約束 嘆き 長い

で

⑬ あだなる 契りを離れた所で 遠く 約束 嘆き 長い

にいる恋人

一緒に住んだこと

恋の情緒が分かる 色好むとは 言える 言はめ。

かは。

⑭ 望月 のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、

向こう て

明け方 晓近くなりて待出でたるが、いと心深う、青み とても 風情があつて青みを帶び

て、

深い 山の杉の梢に見えたる、

て いる 様子や

⑮ 木の間の影 からもれるや 月光 さつと時雨れ 一群れの雲に隠れた月

のほど、

この上なく しみじみとした趣がある またなく あはれなり。

⑯ 椎柴・白樺などの、ぬれたる やうなる 葉の上にきらめき 月が 月が 月が

て いる もの

身に染み渡るようで 一緒に月を見る 一緒に月を見る 一緒に月を見る

しみじみとした味わいを理解する ような がいてくれたらなあ

身にしみて、心あらん

ん 友もがなど、

都 友がいる 恋しく おぼゆれ。

が 恋しく 思われる

⑯ すべて、月・花をば、さのみ 目にて見る ものかは。

そのよう にばかり で だらうか いや、そうではない

月や花に 思いを馳せていることは

⑰ 春は家を立ち去らでも、月の夜は闇の内ながらも思へるこそ、

寝室

に 終助

とても期待が持たれ、趣がある
いとたのもしう、をかしけれ。

⑯ 教養が豊かなひたすらおもしろがっている様子
よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、

副詞

おもしろがる様子あつさりしている
興ずるさまもなほざりなり。

片田舎の人こそ、しつこく全てのことおもしろがる
花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせずまもりて、

花のことをあげくの果てに大きなにじり寄り近づき脇目に振らじつと見
酒飲み、連歌して、果ては、大きくなる枝、心なく折り取りぬ。

泉には手・足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、

下り立つ足跡つけをする

よろづのもの、よそながら見ることなし。
全て距離を置いてがない

副